

すっかんぽ

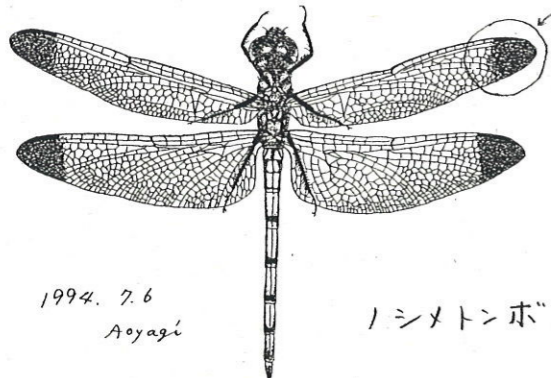
1994年7月号

赤トンボ 予備軍

期末テストの最終日(7/6)、清掃中の生物室に一匹のトンボがまぎれこんできた。天井に止まったところを見はから、モップで軽くはらうと、近くにいた生徒の肩に止まった。

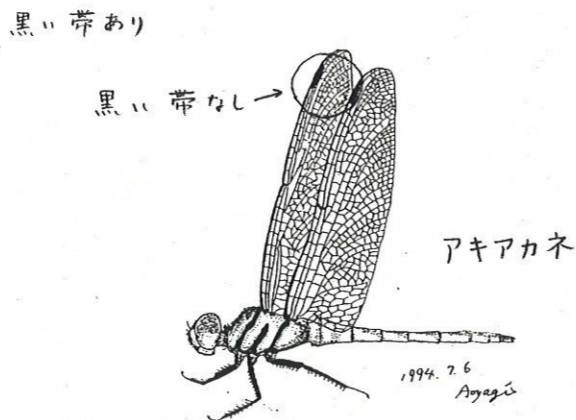
「え、どうしよう」 そう言いながらも、次の瞬間、トンボは、生徒の手の中にあつた。ガサガサッ... トンボの羽音が教室に響く。ノシメトンボだ。翅の先端に黒い帯があるのが特徴である。

一方、職員室前の階段では、生徒が別のトンボとつかまえていた。ノシメトンボと比べるとやや小型で翅に黒い帯がない。こちらは、若いアキアカネであった。ノシメトンボとアキアカネ、いずれも、このあたりの代表的な赤トンボのはずだが、なぜか、ちっとも赤くない。



1994. 7. 6
Aoyagi

ノシメトンボ



1994. 7. 6
Aoyagi

アキアカネ

実は、ヤゴから羽化したばかりの若いトンボは、黄色、ほい色をしており、秋になって成熟すると、いっせいに赤く色づくのである。

しかし、同じ赤トンボでも、ノシメトンボとアキアカネの夏の過ごし方は大きく異なっている。ノシメトンボは、夏を近くの林や草原ですごして、秋になると、池などに産卵をする習性がある。すなわち、定住型の赤トンボなのである。一方、アキアカネは、何十キロ、あるいは何百キロも離れた涼しい高山で夏を過ごし、秋冷とともに成熟(赤くなる)し、平地で産卵をする。言ってみれば、避暑に行く赤トンボなのだ。

最近、奥日光でこんな実験が行われた。8月に約9000匹のアキアカネをつかまえ、フェルトペンで翅にマークをつけて放し、その後、マークをつけた個体が、再びどこでつかまえられるかを調査したのだ。その結果、最も遠くまで移動していたものは、マークをつけてから42日後の10月上旬に72キロ離れた低地で見つかった。この調査によって、盛夏に高山で生活していたアキアカネが、秋の繁殖期になると低地に移動することが実証されたのである。

ところで、宇都宮気象台が観測している、赤く成熟したアキアカネの初見日(その年初めて見た日)の平年値は、9月3日。高山で避暑としている赤トンボ予備軍たちが再び私たちの前に姿を現わす時は、もう、ほい赤トンボになっていることだろう。

